

~LATALE another story~

記憶の扉



ユウキ



旅立ち前夜

燃える城。崩れゆく城壁。その上空は、黒煙に覆われている。高い塔の上や城門の前で、ひとかたまりになり、恐怖に怯える人々。皆に取り囲まれながら、悲痛な顔で何事かを叫ぶ母。その言葉は、私には聞こえない。いや、聞こえないのではなく、理解できない。多分、それは異国の言葉だったから。炎の燃え上がる轟音とすさまじい地響きの中で、それでも、その母の言葉だけは私の耳に届いていた。

「それが、私の人生最初の記憶です。ですが、それは私の体験したものではありません。……私の中の、一族の記憶です」

はっきりとした声で、そう言い終わると、イリス・イヴィエールはまっすぐにカティア・スーの瞳を見つめた。

「なるほど。最後の生き残りにデル族としての記憶を託したというわけか。短い寿命の壁を越える手段として」

冒険者たちの溜まり場となっている酒場で、二人は向かい合って座っていた。多くの客で賑わっているその店は、大小さまざまな話し声や笑い声であふれている。その喧騒は、真剣な話をするには向いていないかもしれないが、その分、二人の会話に注意を向ける者もない。

「……最後の生き残り。確かに私は最後の生き残りです。でも、デル族は決して滅んだわけではありません。一族が復活するために、私が残されたのです。あの戦いから長い年月が過ぎ、私の中のデル族としての血は薄まってしまいました。それでも確かに私の中にはデル族の血が流れ、そしてその復活を信じています」

イリスの声は決意に満ちていた。それは、決して揺るがない信念をにじませてくれた。

並々と注がれたビールジョッキを打ち合わせる音と笑い声がそこかしこで聞こえる。

「そうか。私も同じだ。私も、アトランティスの民が海底都市を再興する日を待ち望んでいる」

今は無き海底都市アトランティスでの遙か昔の記憶を思い出しているのか、カティアは懐かしそうに遠くへ目をやった。

そんなカティアの様子をイリスは嬉しそうに見つめる。

「故郷を取り戻したいという思いで、私たちは同じだと思うのです。でも、そのための行動を起こさなければ、何も変わりはない。だから、私はカティアさんに会おうと思ったのです」

イリスは身を乗り出して、カティアの反応をうかがった。

「ようやく本題というわけだな。それで、私にどうしろと？」

「はい。カティアさんは、〈記憶の扉〉というものをご存知でしょうか？」

「……〈記憶の扉〉」

カティアは考え込むようにして腕組みをし、まぶたを閉じた。そして再びまぶたを開けると、言葉を続けた。

「そう言えば、遠い昔に聞いたことがある。たしか、私が巫女の修行をしていた少女時代のことだ。教えを請うていた神官殿が〈記憶の扉〉の話がされていた。記憶の中にある世界をのぞき見することができるという扉の話……」

「海龍神の秘宝の一つとされているそうですね。しかしアトランティスなき今、その秘宝のすべては失われてしまいました」

イリスは残念そうに視線を落とした。

「確かに。その記憶をとどめている者も、今となっては幾人いることか……。しかし、そなたはなぜそのようなことを知っているのだ？」

それは、もっともな疑問だった。秘宝のことは、海龍神に仕える神官や巫女の間でのみ語り伝えられてきた事柄のはずだ。それを、アトランティスの民でさえない、全くの部外者であるはずのイリスが知っているというのは腑に落ちない。

「古い歴史書です。暗号を用いて書かれてありましたから、解読するのに時間がかかりましたが、おそらくアトランティスの滅亡を察知した誰かが、再興の礎とするために書き残しておいたものではないかと思われまます」

「それを、どこで？」

「王立図書館の書庫です。アトランティスがあったとされる海域にほど近い港町で、海龍神の秘宝について書かれた書物があるという噂を耳にしたので、探していたのです。その本には刻印が押ししてありませんでしたから、記した者か、あるいは託された者が、その書庫の中へこっそりと忍び込ませたのでしょう」

「その噂なら私も聞いたことがある。だが、巫女である私でさえ知らないそんな書物の存在など、地上の人間の戯れ言に過ぎないと思っていたが……」

「ええ、私も眉唾だな、とは思ったのですが、一族復活のためにはどんな小さな足がかりでも欲しかったものですから」

そう言って、イリスはにっこりと微笑んで見せた。

「それで、〈記憶の扉〉の在り処もその歴史書の中に？」

「いえ、詳しくは……。ただ、こう書かれていました。『海龍神の眠る場所。〈記憶の扉〉は夢灯台の中に』」

「そうか」

「カティアさんなら、きっとこの場所がどこだか分かりますよね？」

「そうだな」

その肯定の返事に、イリスは目を輝かせた。

「しかし、それをそなたに教える義務はないと思うが？ 仮にも海龍神の巫女の一人として、秘宝の在り処など、口が裂けても言えぬ」

話がそれだけなら、と席を立ちかけたカティアの腕をつかみ、イリスは強く引きとめた。

「それは分かっています。ですから、取り引きをさせてください」

「小娘の分際で、私と取り引きだと？」

「話だけでも。取り引きに応じるかどうかはカティアさんの自由ですから」

それなら、と再び聴く姿勢になったカティアに、イリスは取り引きの内容を伝えた。

「私は、〈記憶の扉〉がデル族復活の重要な鍵となる事実気が付いたのです。そして、それは同時に、アトランティスの再興を可能にする鍵でもあるのです」

「アトランティスの再興だと？」

「そうです。口伝によって伝わってきた秘宝の内容が、滅亡にあたって歴史書として残された意味もそこにあると思うのです。秘宝さえ手中にあれば、再興も可能だ、と」

「して、その方法は？」

「はい。それが取り引きです。カティアさんが〈記憶の扉〉のある場所へ私を連れて行ってくだされば、私はアトランティス再興の手立てをお教えします。悪くない話でしょ？」

イリスは、再びにっこりと微笑んだ。その自信に満ちた様子が、カティアは気に食わなかったが、彼女の言うとおりに決して悪くはない取り引きのようだった。

「しかし、そなたの目的はデル族の復活であろう。それは、アトランティスの再興と共にできるものなのか？」

「〈記憶の扉〉の力をもってすれば、問題ありません」

「それならば、……分かった。その取り引きに応じよう」

イリスは、ありがとうございます、と言ってカティアの手を握りしめた。そのイリスの憎めない様子も、デル族が持つとされる神秘の力の一つなのだろうかと、カティアは苦笑した。

「その話、オレも乗った！」

取り引きの成立した二人の間に割って入ったのは、カズノ・ナスだった。

「いやあ、たまたまこの店に入ったら、二人がなんか真剣な顔で話し込んでるし、声、かけそびれちゃってさ。でも、そのおかげで良い話、聞けちゃったよ」

馴れ馴れしく二人の肩をたたきながら、カズノはさも当たり前のように二人の間にある椅子に腰をおろした。

「盗み聞きとは、いい度胸だな」

カティアは、無然とした表情で言い放った。

「聞くつもりなんてなかったんだよ？ たまたま耳に入ってきたっていうか？ だから、そんなに怒らないでよ」

カズノはカティアの顔をのぞきこむが、カティアは、ふんとそっぽを向いてしまった。

「オレ、二人のボディガードってことで、一緒に連れてってよ。絶対役に立つと思うよ。ね、イリスちゃん」

同意を得られそうにないカティアの代わりに、カズノはイリスに助けを求める。

「私は別に構いませんけど。人数は多いほうが心強いですし。……あの、カティアさんが良ければ、ですけど」

イリスもカティアの顔をうかがう。

「断る」

即答するカティアに、二人は顔を見合わせて苦笑する。

「だいたい、なぜカズノにまで秘宝の在り処を教えねばならないのだ」

「オレはただ、世の中の見聞を広めたいだけ。お宝は二人が故郷のために使えばいいじゃん。それとも、何？ 二人の後をこっそりつけたら、海龍神の秘宝の場所まで案内してくれるよって、噂を流そうか？」

カズノはにやりと笑って、カティアのほうを見た。

「卑怯な奴」

カティアは苦虫を噛み潰したような顔で、カズノをにらみつける。

「冗談だって。オレがそんな、二人を困らせるようなことするわけないじゃん」

ハハハ、と軽く笑って見せ、イリスも見かねて言い添える。

「まあ、カズノさんは一緒に旅をしたお仲間ですし、頭の切れる方ですから、私たち二人で行くよりも安心だと思いますよ？ 秘宝を狙っているわけではないみたいですし。ね？」

最後はカズノに強く同意を求めた。

「もちろん。悪いようにはしないって」

「話を聞かれた以上、仕方がないか」

あくまでも軽く言い募るカズノに根負けして、カティアは溜め息を一つついて、同行を了承した。

「で、そこ、遠いの？」

「何、三日もあれば着く」

「では、早速、明日の朝、日の出と共に出発ということよろしいですか？」

そして三人は街はずれにある城塞門で待ち合わせることを約束し、その夜はそれぞれの寢床へと帰っていった。

旅立ちの朝

翌日の朝。まだ日は昇らない、ほの暗い石畳の通り。霧がかかったように空気はうっすらと白い。

道行く人はほんの数えるほどだが、市場へ向かう商人や出立する旅人など、朝が来るのを待ちかねたように急いでイリスのそばを通り過ぎていく。

まだ一日は始まったばかりだ。

カティアたちと別れてから急いで旅の準備をしたイリスは、眠れぬ夜を過ごした。もうすぐ一族の悲願が達成されようとしているのだ。嫌でも頭は冴えてしまう。

海龍神の秘宝、〈記憶の扉〉というキーワードにたどり着き、その在り処ももうすぐあきらかとなる。そこに至るまでの数年をイリスは眠れぬベッドの上で思い返していた。

「すべてはきっと、導かれていたのだわ」

燃える城の記憶、母の言葉。それはイリス個人の記憶ではないし、「母」はイリスの母ではない。それもすべて、今まさに滅びようとしていたデル族が残した最後の奇跡。イリスはそれを受け継ぎ、長い呪縛を解き放つのだ。

結局、一睡もできないまま、イリスは部屋を出た。

二人と待ち合わせている城塞門は、街の目抜き通りをまっすぐに進み、商店や宿の立ち並ぶ中心地を抜けた先にある。街は周囲を城塞に取り囲まれているため、街から出るためには、城塞門を通らなければならない。平和な世になった現在には unnecessary 城塞だが、戦を繰り返していた時代の名残りはいまだ各所に残されている。

イリスが城塞門に着いた時には、まだ二人の姿はなかった。

「早く、来すぎたみたい」

日が昇り始めるには、まだしばらくかかりそうだった。

イリスは、開け放された門にもたれかかってゆっくりと腰をおろした。

街の外には草原が広がっている。遠く離れて、同じような城塞に囲まれた別の街が見える。

「行き先のこと、少しも聞かなかったけれど、どんな場所なのかしら」

イリスは街の外を見てもなしに見ながら、これから行くはずの場所のことに思いを巡らす。そうしているうちに、一睡もできなかった頭が疲れを覚え始めたのか、うつらうつらと明け方の心地よい風の中で居眠りを始めた。

「……スちゃん、……イリスちゃん」

「……ん、」

「こんなところで寝てたら風邪ひくよ？」

イリスがゆっくりと目を開くと、カズノが顔をのぞきこみ、そのそばでカティアが立って、こちらを見下ろしている。

「あ、ごめんなさい。私、寝ちゃってたみたい」

イリスは慌てて立ち上がる。

「何、ようやく日が昇り始めたところだ。あんまり気持ち良さそうに眠っているから、しばらくそのままにしていたのだが、カズノが来たからな」

「でも、このままほっといたら、しばらく起きそうになかったしね」

カズノはイリスの申し訳なさそうな顔を見ながら、にっこりと微笑む。

「早く出発しなくちゃ、ですものね」

イリスは元気に答えて、歩き出した。それに二人も続く。

「イリス、眠れなかったのか？」

カティアはイリスの隣に並んで話しかける。

「ええ、まあ」

「旅立ちの前夜は、大抵そういうものだ」

「カティアさんも？」

「まあな。ずいぶん長らく訪れていなかった場所でもあるし、私も少し緊張している」

「何、何、これから行くのって、そんなに緊張するような場所なの？」

カズノは茶化すように、二人の会話に割って入る。
「カズノはどこへ行ったって緊張しなさそうだな」
「なんか、その言い方、微妙に傷付くんだけど」
少し拗ねてみせるカズノに、イリスは面白そうに笑い、カティアは馬鹿にしたような顔をした。
こうして三人の旅は始まった。

港町にて

イリスたち一行が向かったのは、ある港町だった。

そこは、海底都市アトランティスがあったとされる場所から一番近い街だった。また、イリスが海龍神の秘宝について書かれた書物があるという噂を耳にした街でもある。

その港町に着いた時には、すでに日は高く昇り、暑いくらいの気温になっていた。

漁業で栄えたその街は、多くの商人の集まる場所であり、また、高度な文明を発達させていたアトランティスの影響か、学者の多い街でもあった。そのため、イリスの聞いた秘宝についての噂は、単なる噂にとどまらない可能性を大いに秘めていたというわけなのだ。

「わあ、相変わらず、この街はにぎやかですね」

イリスは久しぶりの来訪に、懐かしさで目を輝かせている。

「ま、平和な世になってから、よりいっそう人も集まって、繁栄を謳歌してるみたいだからな、この街は」

カズノは遠くを見るような目で応じた。

「カズノさんは、この町に来たことがあるんですか？」

「まあ、昔に」

「へえ、ジエンディア大陸でカズノさんの行ったことのない街なんてないんじゃないですか？」

「そうでもないさ。……そう言えば、この街、アトランティスのあった場所から近いみたいだし、アトランティス人が結構混じってるって噂だけど、そうなのか？」

カズノは前を歩いていたカティアに声をかける。

「少しはいるだろうが、ほとんどのアトランティス人は、今も海底で暮らしている。個々にばらけて、街と呼べるほどのものをつくられていないようだが」

「へえ、そうなんだ。海の底なんて退屈そうだし、地上に出てくりゃいいのに」

「地上の空気は性に合わない。私も、アトランティスの再興という目的がなければ、地上になどやって来はしなかった」

「そりゃ、大義名分に感謝だね」

「なんのことだ？」

「その大義名分のおかげでカティアに会えたってこと」

カティアは、ふんと鼻を鳴らすが、イリスもカズノに同調する。

「そうですよ。カティアさんと出会ってなかったら、〈記憶の扉〉の在り処も見つけられなかったかもしれないですし」

見ると、そんな一行の行く手に、人だかりが出来ていた。

中心になっているのは二人の男で、一人は髭をたくわえた中年の男。手には分厚い本を持っている。もう一人は、年若い青年で、縁なしの眼鏡をかけている。

「証拠はあるのか」

「ありますよ、もちろん」

「じゃあ、見せてみろ」

「見せられるようなものじゃないですよ。僕の証拠はあくまでも理論ですから」

「なら、その理論とやらを説明してみろ」

「それは出来ません。今度の学会で発表するつもりですから。その前に僕のアイデアを盗まれちゃたまらない」

「盗むだと。お前のような小僧の考えた出来損ないの理論など誰が盗むものか」

道の真ん中で、二人は延々と言い争っているようだ。その合間には、取り囲んでいる人々から野次も飛ばされている。

「喧嘩でしょうか」

イリスが心配そうに人だかりの中を覗きこむ。

「いや、いわゆる学者論争ってやつだよ。この街じゃあ、珍しくもない。ああやって、学者同士が論争を吹っかけあつてるんだ。それを街のみんなが面白がって、時にはどっちが勝つか賞金をかけたりする。まあ、一種の娯楽だな」

カズノは訳知り顔で、イリスに説明する。

「私、初めて見ました。前にこの街に来た時は、ああいう人たちには出会わなかったから」

「どこで始まるかなんて分からないからな。出くわさない時は一度も出くわさないもんさ」

「ああいう連中には関わらないほうが良い。先を急ごう」

カティアは、立ち止まって論争のゆくえを聞いている二人を促した。

「えー、もう少しいいじゃん」

カズノはわざとらしく不服の声を出す。

「どうせ、カズノも知っているのだろう。あれはたいていがアトランティスに関する論争だ。ああやってアトランティス人の気を引いて、興味を示したところで後をつけられるのだ。アトランティスの財宝と科学力を手中にしたい連中だよ」

いまいまげにカティアは言葉を吐き出す。

「なんだ、知ってたんだ。後をつけられてみるのも面白いかと思ったんだけど、残念」

どこまで本気なのか分からない調子で、カズノは軽口をたたく。

「そういうことなら、こちらに気付かれないうちに先を急ぎましょう」

真剣な表情でイリスは律儀に応じる。カティアは頷き、歩調を速めた。

三人は人の往来の多い中心部を抜け、海岸に向かって歩いていた。

三人の向かった海岸は、船着き場のある地域よりも北にそれた場所で、人影は皆無だ。漁業で栄えた街だけあって、朝晩は船の発着で海岸沿いは騒がしく、船が漁に出ている昼間も新鮮な魚を売る売り子の声で賑わっている。それが毎日の船着き場の光景だ。

しかし、その界限から北にそれると様子は一変する。遠浅の地形のため、船が岸に寄せられず、誰も近寄らないのだ。遠浅に加えて、海底はごつごつとした岩が乱立しており危険なために遊泳も禁止で、忘れ去られた場所と化していた。

「この街に、こんな場所があったなんて。中心部からそんなに離れていないはずなのに、雰囲気は大違い」

イリスは驚いて、その殺伐とした海岸を見つめた。打ち寄せる波の音も、心なしか寂しげに聞こえる。

「ほら、あそこに、岩が突き出ているのが見えるだろう？」

カティアは、まっすぐ沖のほうを指差した。その指の先をイリスとカズノは目でたどる。

少し遠くてよく見えないが、たしかに岩らしきものが突き出ているようだった。ときおり岩にぶつかる波が白く光って見える。

「あの下に洞窟がある。その奥が『海龍神の眠る場所』だ」

「海の中？ 泳いで行けるの？」

カズノは落胆してつぶやく。仮にも海龍神の秘宝だ。海の中に隠されていてもおかしくはない。

しかし、高度に発達した科学力により、海の中でも酸素を取り入れられるアトランティス人ならともかく、イリスたちが海底に行くには何らかの対策が必要だ。

「あと二日も待てば、あの岩まで潮が引く。そうすれば歩いて洞窟の中へ入れる」

こともなげにカティアが言葉を続け、イリスとカズノはほっと胸をなでおろした。

「それで、本当にあの洞窟の中には海龍神が眠っているの？」

イリスは恐る恐るカティアに尋ねた。海龍神の眠っているそばを通り抜けて秘宝を手に入れるにはかなりの勇気がいる。

すると、カティアは笑って答えた。

「それは、ただの伝説だ。『海龍神の眠る場所』と呼びならわされてはいるが、実際にはただの洞窟だ。海龍神には、今は別の場所でお休みいただいている」

「なんだ、伝説か。良かった」

イリスは、ほっと息をついた。

「でも、『夢灯台』っていうのは？ たしか、歴史書の中には、『海龍神の眠る場所。〈記憶の扉〉は夢灯台の中に』って」

「行けば分かる」

「で、こんなところで二日も待つわけ？」

不服そうにカズノが言う。

「二日で済んでむしろ幸運だと思うことだな。あそこまで潮が引くのに、タイミングが悪ければ一週間待たなければいけないこともある」

カズノは溜め息をついて押し黙った。

「ところで、この近くに、知り合いが住んでいるので、訪ねてみようと思うのだが。潮が引く頃にはまた戻ってくる」

突然、そう言い置くとカティアは来た道を引き返し始めた。

「そういや、オレも野暮用があったんだった。じゃ、またあとでな、イリス」

そう言ってカズノもどこかへ行ってしまい、寂れた海岸にはイリスが一人残された。

「……あそこに、〈記憶の扉〉が」

イリスは遠くに見える小さな岩を凝視しながらつぶやいた。もうすぐ手が届くというところまで来ているのだ。その思いに、イリスはいてもたってもいられない気持ちで胸がざわざわした。

夢灯台

そして二日後。再び海岸に集まった三人は、潮が引いてあらわになった海底を洞窟の入り口まで歩いていった。岩が折り重なるように連なり、洞窟まではなかなかたどり着けない。

「……簡単には、秘宝は拝めないってことか……」

誰にともなくカズノは嘆息し、イリスもそれに同調する。

「ところで、カズノさんは二日間、どこへ行っていたんですか？」

「だから、野暮用だって。オレくらいになると、いろんなところで引っ張りだこなんだよ」

「はあ、そうなんですか」

なんだかよく分からないという表情で一応頷いてはみたものの、なんとも釈然としない返答だった。

なおも三人は歩き続け、やっと洞窟までたどり着いた時には、みんな汗びっしょりだった。

汗を拭きながら、その入り口にたたずみ、中を覗きこんでみる。しかし暗くて何も見えない。

カティアは荷物の中からランプを取り出して明かりをつけると、真っ暗な洞窟の中を照らした。中は思った以上に広いらしく、光の先にはさらなる闇が広がっている。

「この奥だ」

三人はカティアを先頭にして、洞窟の中を進んでいった。

辺りを満たす闇がそう感じさせるのか、歩いても歩いても、一向に進んでいる気がしなかった。

どれくらい歩いたのか、突然カティアが歩みを止めた。そしてランプの明かりが遠くまで届くように高くかかげる。

光の照らし出した先に見えたのは、巨大な円柱状の岩だった。

「伝説では、あの円柱状の岩に海龍神が眠ると言われている。実際には違うがな」

事実はどうあれ、たしかにその岩は海龍神がとぐろを巻いて体を横たえる様を想像させる大きさと雰囲気を持ち合わせていた。

「で、秘宝は？」

カズノが待ちきれないというように、期待に満ちた声で尋ねる。するとカティアは、洞窟のさらに奥を指し示した。

「あの穴の先だ」

円柱状の岩の向こうは行き止まりになっており、その代わりに人一人がやっと通れるくらいの穴が開いていた。

カティアはその小さな穴の前まで来ると、ランプをその入り口付近に置き、身をかがめてその中へ入っていった。そして、イリスとカズノも続いて入っていく。

穴は狭くて先は見通せないが、出口まではすぐだった。そして、洞窟の中の暗さに慣れていた目にはまぶしすぎる光が一気にあふれてくる。

「さあ、着いたぞ」

あまりのまぶしさに目をあけていられなかった二人だが、次第にその明るさに慣れてくると、そこが灯台の真下であることが分かった。頭上には雲ひとつない青空が広がり、灯台の向こうには広大な海原が白波を寄せている。

「……ここは、一体……」

イリスがつぶやく。引き潮を待って洞窟の中を進んでいたと思ったら、そこは外の世界につながっていたのだ。しかし、それはあの港町ではないようだった。第一、あの海岸付近に灯台など見当たらなかった。

「これが夢灯台だ」

「……夢灯台」

「ここは、海底都市アトランティスの一部なのだ。時空のねじれにより分散したアトランティスは、こうしてその一部を各所から垣間見られるのみとなってしまった。しかしそれでも私の故郷であることに変わりはない」

「へえ、滅亡したアトランティスの秘宝は、いまだアトランティスにあったってわけか」

カズノも、周りには灯台しかないその不可思議な空間を眺めまわす。

「イリス、これが秘宝だ」

そう言って、カティアは目の前の灯台を指し示した。

「え？」

「これは灯台であって、灯台ではない。この夢灯台の扉こそが、〈記憶の扉〉なのだ」

「これが、……〈記憶の扉〉……」

イリスはまじまじと目の前に立ちはだかる扉を見つめた。何の変哲もない、ただの扉。それは人の目を欺くためのもの。きっと魔力はこの扉に封印されているのだろう。

「では、聞かせてもらおうか。アトランティス再興の手立てとやらを」

「わかりました。まず、〈記憶の扉〉でカティアさんの中にあるアトランティスの記憶を呼び出すのです。それを私の、デル族の力で現実に変換します」

「デル族にそのような力が？」

「はい。私たちの持つ神秘の力の一つです。さあ、カティアさん、アトランティスの記憶を心に描いて〈記憶の扉〉を開いてください」

カティアは大きく頷き、扉の前にすっと立った。そして目を閉じ、深呼吸をする。再び目を開くと、両手を扉の取っ手につけ、強く引いた。扉はギーと軋みながら、少しずつ開いていく。心には懐かしいアトランティスの風景。

ところが扉の向こうに広がっていたのは、アトランティスの風景ではなく、薄暗い灯台の内部だった。

「これは、……どういうことだ」

夢灯台の扉はたしかに海龍神の秘宝〈記憶の扉〉に間違いはない。カティア自身はそれを使ったことはないが、巫女の修行の中で秘宝については一通り教わっている。

「〈記憶の扉〉って、要は時空をゆがませる装置なんだろう？ だったら、アトランティス滅亡の原因となった時空のゆがみの影響が出ちゃったんじゃない？」

カズノの意見ももつともだった。

「それじゃあ、この計画は、失敗……」

イリスは肩を落とした。

「カティアさん、ごめんなさい。ここまで付き合わせてしまったのに」

「いや、そなたのせいではない。計画自体は間違っていなかったよ。〈記憶の扉〉さえ使えていれば……」

イリスとカティアの望みは再び振り出しに戻ってしまった。

「さっきの学者論争、最後まで聞いときゃ良かったかもね」

カズノが伸びをしながら、独り言のようにしてそう言った。

「学者論争？」

カティアが怪訝な顔で尋ねる。

「さっきの、海龍神の秘宝は健在か？ っていう論争だったみたいだよ。髭の男のほうに健在だって言って、若い方が少なくとも一部はその力を失っているって主張してたみたい」

「お前、まさか最初から知っていたのではないだろうな」

聞き捨てならないと、カティアはカズノに迫る。

「まさか。まあ、そんな噂を耳にはしてたけど、本当かなあって半信半疑だったし。で、さっきの若い方が証拠はあるって言ってたから、潮が引くまでの間にちょっと探りを入れてみたんだよね。それで時空のゆがみって話を聞いて、ね。でも、ここまで来たんだから自分の目で確かめてみようと思って、何も言わなかったんだけど」

カティアもイリスもがっかりとうなだれる。

「確かに、自分の目で確かめるまでは、私もそんな話は信じなかったかもしれないな」

「でしょ？」

何も言わなかったことに対して少しの罪の意識を感じていたカズノだったが、カティアのその言葉を聞いて、にわかには元気を取り戻したようだった。

「それにしても、カズノさん、私たちに話してくれても良かったじゃないですか」

「まあ、済んだことはいいじゃない」

イリスがいくらなじっても、カズノはどこ吹く風と笑うばかりだった。

記憶の扉

<http://p.booklog.jp/book/27542>

著者：ユウキ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuuki-parola/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27542>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27542>